



©MIRAIEIGASHA

A Samurai in Time

侍タイムスリッパ

2024, 131 min, English subtitles

Director: **YASUDA Junichi**

Cast: YAMAGUCHI Makiya, FUKE Norimasa, SAKURA Yuno

【ネタバレ注意】

時代劇の衰退が言われて久しいが、2024年は戦国時代を舞台にしたアメリカのドラマ『SHOGUN』が話題となり、出演した真田真之ら日本人俳優もエミー賞、ゴールデングローブ賞を獲得するなど高く評価され、このジャンルへの関心が時ならず高まった年であった。この気運を盛り上げたもう一人の立役者が『侍タイムスリッパ』である。

本作は安田淳一監督が2000万円の自己資金を捻出し、撮影から編集まで自らがけた自主映画であり、有名俳優も出演しておらず、規模だけ見ると『SHOGUN』の対極のような作品である。にもかかわらず、単館上映から口コミで話題となって全国に拡大公開され、昨年度の流行語大賞の候補になるほどのブームを巻き起こしたのであった。

この映画はなぜそれほどヒットしたのだろうか。幕末の会津藩士が決闘中に雷に打たれて現代の京都太秦撮影所にタイムスリップ、時代劇の斬られ役に第二の人生の活路を求めるという物語は、SF時代劇の構えである。しかし本作が描くのはSF的展開の面白さというより、実直な下級武士が運命に翻弄されながらも懸命に生きる姿であり、そのひたむきさが将来に希望を見いだせない令和の日本人の琴線にふれたのかもしれない。それとも、主人公を芝居に巻き込んでいく助監督や殺陣師らクリエイターたちの時代劇にかける情熱が、観客の胸中に忘れていた感情を呼び覚ましたのだろうか。

この映画が「京都の時代劇」へのオマージュであることは確かである。監督は当初主人公に福本清三を想定していたというが、福本は大部屋俳優出身で斬られ役・殺され役に徹し、「日本一の斬られ役」とまで言われた俳優だ（本作の製作前に亡くなったので、出演は実現しなかった）。福本のプロフェッショナルな演技は多くの映画人から敬意を払われ、ハリウッド映画『ラスト・サムライ』の寡黙な侍役に抜擢されたり、『太秦ライムライト』では自身を彷彿とさせるストイックな斬られ役俳優として主演するなど、そのキャリアは晩年になって大きく花開いた。名もなき斬られ役が役作りに懸命に取り組むという本作の設定には、福本のイメージが明らかに投影されている。劇中で主人公に殺陣を教える殺陣師を演じた峰蘭太郎も福本との縁が深く、福本が着ていた服を衣裳として身につけたという。

京都はかつて東京と並ぶ映画都市であり、多くの時代劇を製作してきた。勧善懲悪のチャンバラ活劇だけでなく、山中貞雄の『人情紙風船』、黒澤明の『羅生門』、溝口健二の『西鶴一代女』、衣笠貞之助の『地獄門』など、数々の名作がこの街で作られている。京都で時代劇が発達した理由はいくつかあるが、「日本映画の父」と呼ばれた牧野省三が京都の興行師であり、彼が京都北西部に撮影所を開き、多くの映画人

Dates & Venues	Dates may vary
7 – 16 February Institute of Contemporary Arts (ICA), London	14 – 18 February Chapter, Cardiff
7 February – 29 March Firstsite, Colchester	14 February – 5 March The Ultimate Picture Palace, Oxford
7 February – 29 March Phoenix, Leicester	16 February – 31 March Eden Court, Inverness
7 February – 16 March QUAD, Derby	16 February – 9 March Hyde Park Picture House, Leeds
7 February – 31 March The Phoenix Cinema, Kirkwall (Orkney)	17 February – 6 March HOME, Manchester
7 February – 6 March Warwick Arts Centre, Coventry	21 February – 4 March Riverside Studios, London
8 February – 29 March Brewery Arts Cinema, Kendal	22 February – 23 March Dundee Contemporary Arts, Dundee
8 February – 31 March Chichester Cinema, Chichester	1 – 31 March Aberystwyth Arts Centre, Aberystwyth
8 February – 30 March Frankopan Hall, Jesus College	1 – 29 March Exeter Phoenix, Exeter College
8 February – 30 March Queen's Film Theatre, Belfast	3 – 31 March Cinema City Picturehouse, Norwich
8 February – 5 March Storyhouse, Chester	3 – 24 March Picturehouse @ FACT, Liverpool
9 February – 16 March Cube Cinema	6 – 31 March Cameo Picturehouse, Edinburgh
9 – 28 February Showroom Cinema, Sheffield	6 – 27 March Plymouth Arts Cinema, Plymouth
9 February – 1 March The Dukes, Lancaster	10 – 31 March City Screen Picturehouse, York
10 February – 31 March Tyneside Cinema, Newcastle upon Tyne	14 – 20 March Broadway, Nottingham
13 February – 8 March Depot, Lewes	14 – 20 March Midlands Arts Centre, Birmingham
13 February – 23 March King Street Cinema, Ipswich	

Major Supporter



Sponsors in Kind



Calbee

Clearspring **Pentel**

Cultural Partners



や剣劇スターを育てたことは大きい。また、京都には社寺が多く、山林や河原も近かったので、時代劇の風景に見立ててロケーション撮影がしやすいという地の利にも恵まれていた。

時代劇を作るためには、昔の家屋や街並みを再現したセット、大道具はもちろん、衣裳（着物）、かつら、刀、室内調度品などの小道具も必要である。そのため京都には時代劇専門の撮影所や小道具会社が設立され、いろんな職人たちが働いてきた。殺陣の演出をする殺陣師、主人公に斬られてドラマを盛り上げる斬られ役などの仕事も、京都ならではの職業だろう。本作の実現にあたっては、東映京都撮影所、小道具の高津商会が監督の意気をくみ取って、破格の条件で協力している。この映画は、おそらく京都でしか作ることができなかったにちがいない。

近年の時代劇離れは激しく、会社や撮影所は閉鎖され、時代劇作りの技術の継承も風前の灯火となっている。その一方、21世紀になり、山田洋次の『たそがれ清兵衛』などの藤沢周平もの、香港映画のワイヤーアクションを取り入れた『るろうに剣心』シリーズ、明治時代の北海道を舞台にアイヌの宝の争奪戦を描いた『ゴールデンカムイ』など、新しい感覚のクリエイターたちが新たな地平を切り拓いてきた。時代劇を自主映画として作るという本作の試みも、その流れの掉尾に位置する。今後、時代劇はどう変わっていくのだろうか。

成実弘至

京都女子大学教授

Copyright belongs to the Japan Foundation. You may not copy, reproduce, distribute, modify, or distribute any part in any form without permission. Any errata are the responsibility of the Japan Foundation.